《インタビュー》

ナツァックドルジン・アーナンダシュリーと会って

芝山　豊

ダシドルジン・ナツァックドルジは近代モンゴルを代表する文学者であり、没後四十数年を経た今も、モンゴル人の間で最も愛されている詩人である。

彼はモンゴルが未だ清朝に帰属していた1906年に貧乏貴族の家に生れた。その卓抜した読み書きの能力を認められた彼は、辛亥革命に続く、独立と革命の疾風怒濤の時代に政治の世界に足を踏み入れる。二十代でロシア、ドイツへの留学。帰国後、黎明期のモンゴル「近代文学」の新しい頁を開いた。詩人、劇作家、小説家、辞書編纂者、そして歴史家でもあった彼は「近代文学の父」と讃えられ、ソ連時代にはプーシキンに比べられることさえあった。

しかし、その高い評価にもかかわらず、草稿の完全な校訂テキストによる著作集はいまだに刊行されておらず、その生涯も一般の人にはあまり知られていない。

数度にわたる投獄と拷問の後遺症に苦しみ、過度の飲酒で荒んだナツァックドルジの晩年の唯一つの希望はロシア人の妻ニーナとともに、一歳八ヵ月で自分のもとを去った一人娘との再会であった。彼は二人のいるレニングラード行きの許可を願いで、一旦は許可されるが、こころない讒言によって足止めされる。失意の内に、夏祭りの喧騒から遠く離れた円形劇場の柵によりかかって、彼は息をひきとった。遺体が発見されたのは死の数日後のことであった。1937年、三十一歳での夭折である。

詩人の娘はその父の死を知らずに育った。

ロシアからバルト沿岸のエストニアに移り住んだ彼女は、1966年、父の生誕六十周年の記念式典に招待されて再びモンゴルの地を踏む。その頃の彼女はソビエト・ロシアとモンゴルの友好の生きた証であった。やがて、ソ連は崩壊し、彼女は排外的な民族主義が色濃い独立エストニアから、生まれ故郷へ帰ることをモンゴル大統領に直訴、受け入れられる。当時、モンゴルのマスコミは一様に彼女の帰国を歓迎した。民族文字の復活をはじめ、ソビエト・ロシアに取り上げられたものを性急にとり戻そうとしている国民にとって、彼女の帰還はその象徴のようにも見えた。

私は1994年の初夏、その詩人の娘、ナツァックドルジン・アーナンダシュリーに会うために外務省の前から９番のバスにのった。

彼女は明るい笑顔で迎えてくれた。人参の入ったピロシキとモンゴル風の大きな器にはいったミルクティーでのもてなし。彼女は「今日はお祝いだから」と切り出した。５月９日はレニングラード攻防戦勝利の記念日だという。彼女は第二次大戦中、圧倒的ドイツ軍に包囲されたレニングラード攻防戦を少女として生きぬいた人であった。

彼女は、まず、自分の二十歳頃の写真と同じ年ごろの父親の写真を出して、テーブルに並べた。見比べると輪郭、顎のあたりの線がとても似ている。それを伝えると彼女は満足そうに微笑んだ。

＊　＊　＊

（以下は彼女との対話の覚え書きであるが、我々の交わした会話の完全な速記録ではなく、内容をある程度整理し再構成したものである。Ｓは筆者、Ａはアーナンダシュリーを示す。）

インタビュー時のアーナンダシュリー

S：　十年近く前に一度お目にかかっていますが、もうご記憶にはないかと思います。私は以前、日本語で父上の作品と生涯を紹介しましたが、自由になったモンゴルで確かな材料をもとに、現代史の文脈の中での父上のほんとうの姿を改めて日本に紹介したいと思っています。実は、モンゴルの新聞にのった記事をもとに、今月発行される雑誌にあなたのことを書きました[1]。今日は何度もモンゴルのマスコミや研究者に聞かれたことの繰り返しや、失礼なことを伺うかもしれませんが、その真意をおくみとりのうえ、お答えいただければ幸いです。

A：　どんなことでも結構ですよ。遠慮なくどうぞ。モンゴルの新聞に色々なことがでていますが、信用しないでくださいね。

S：　まず女性に失礼な質問ですが、お生れになったのはいつですか？

A：　1934年３月22日です。

S：　お母さまがお生まれになったのいつでしょうか？

A：　パスポートでは10月となっていましたかしら。でも、私が覚えているのは、1909年11月25日です。

S：　自分がナツァックドルジの娘だということを長い間ご存じなくて、ブルドゥコヴァか誰から聞かれたという風に聞いていますが、それはいつ、どのようなきっかけでお知りになったのですか？

A：1952年になって、全く突然、タイシャ・アレクセイワ・ブルドゥコヴァという十二歳までモンゴルにいたというモンゴル語のよくできる中年の女性[2]がやってきて、あなたは有名なモンゴルの詩人のナツァックドルジの娘だといったのです。父の死後、十五年たって突然こんな情報がもたらされたのは、著作権の消滅と関係があるのではないかと思っています。当時は、なにか、十五年で著作権が放棄されるような法律があったように聞いていますので。

それまで、母からは、私はモンゴルで生まれ、父は駆出しの無名の作家だと聞かされていました。当時は戦争の最中でしたから、小学校の友達の多くは父を亡くしており、父がいないということで負い目を感じたりしたことはありませんでした。

小学校六年生くらいの時に、レニングラードに別のナツァックドルジという名の作家がやってきて、父だと思って会いにいった母が父の死をきかされたことは知っています[3]。母がモンゴルとの連絡をもたなかったのは、当時、モンゴルへの連絡をとろうとしたりすれば、大変なことになるのを友人達の例からよく知ってたからです。自分からモンゴルに連絡をとろうなどという愚かなことをして、母親は逮捕、子供が悪名高い施設に送られるといった事態を招くようなことをしませんでした。もちろん、母は時代の恐ろしさを知っていましたが、わたしたち子供はいつもソ連が正しく、世界でスターリンが一番偉い人だとかたく信じていたわけです。そんな時代だったのです。

S： 二人がレニングラードに去られたのは何故だったか母上は話されましたか？それは政治的なことですか、それとも、ご両親の間の個人的な問題だったのでしょうか？[4]

A： 個人的な理由によると思います、母が話したわけではありませんが。ドイツ語は話しませんでしたが、半分はドイツの血をひく母の性格から考えて、つぎのようなことだったのではないかと思っています。第一に、ドイツ的でどちらかというと非感情的な母の性格と芸術家肌の父の常に情動的な行動があわなかったこと。第二に父の奔放な女性関係、第三に飲酒癖だと思います[5]。

実は母は私のことを疎んじていたのです。

ボロジヤ・リイエスボイというウランバートルのソ連大使館に勤めていたという人物が父のことを小説にしたいといって、それこそ毎日のように、花とチョコレートを持ってやってきて、母と親しくなりました。タリンにいるころで、80年から85年くらいにかけての話です。そうですね、あなたの言われる通り、母はもう七十歳を過ぎていたでしょうね。でも、彼女はまわりの人がびっくりするくらいに若々しかったんですよ。とにかく、その人は結局、本を書いて、作家の仲間入りをしたのです。もっとも、その本は作家や批評家達から芳しい評価を得られなかったようです。彼はその本を送るといいましたが、私の手元には届きませんでした。あなたもお読みになったことがないんですか。本当にたいした本じゃないということですが、サンクト・ペテルブルグの図書館にはきっとあるはずですから、今度サンクト・ペテルブルグにいったら見るつもりです。何故かといえば、その人は私の初めて書いた詩をもっていってしまったのです。ヤツコフスカヤはその本には誰が書いたのかわからない詩が沢山はいっていたといっていました。きっと私のものでしょうね。

まぁ、とにかく、その人物から聞いた母の話ですが、母は父との間に子供が欲しくなかったのです。妊娠がわかって、父に生みたくないといったところ、父は生まれてからどこかにやってしまえばよいということを言ったので、安心して産んだというのです。生まれてみると、母性本能にめざめて手放す気がなくなったのです。だから、「おまえはロシアへかえってもよいが子供はおいていけ！」という父に私を渡しませんでした。でも、私は母にとって、望まれない子供だったのです。

その話を聞いて私には納得できました。自分がなにか母の気に入らないことをすると、母は、きまって、「おまえにはモンゴル人の血がながれているから、そんなに片意地なんだ」といって詰りました。それは母親のモンゴル人に対する見方を反映していたように思います。母は私をあまり愛していませんでした。

S： ロチンという人が十年ほど前に書いた本にはあなたがたびたび登場し、父上と話をしていますが、そうした記憶はありますか。彼の取材を受けられたのですか[6]。

A： その人を知りません。もちろん、一歳八ヵ月の私は父とことばを交わした記憶はありません。

S： あなたはレニングラードでもナーナと呼ばれていましたか、なぜナーナなのかということの説明を何か聞かれましたか？あるモンゴル人はナツァックドルジのナとニーナのナでナーナになったと言っていますが[7]、アーナンダシリという名前の由来についても何かきかれましたか。

A： 大学にはいるまで、いつも家では、ナーナと呼ばれていましたが、それは、アーナンダからきたもので、ナーナはロシアでも、フランスでもよくある名前だと思います。ナツァックドルジとニーナからとはおもえませんね。リンチェン先生が教えてくれたのですが、アーナンダシリではなくシュリーです[8]。その名に特別の感慨はありません。私が生まれた時、リンチェンと父が相談して、昔のだれか聖

父　ナツァックドルジ

若き日のアーナンダシュリー

人の名前をとったということ聞きました。四年前に癌を宣告され、余命五ヵ月といわれたのですが、東洋医学のおかげでいまもこうして元気でいます。モンゴルにきて、ほらあの絵、私が描いたボグド山なんですけれど、あの下の方にちょこんといるのが、土地の神様というつもりなんですよ。ここに来て、モンゴルの神々を感じるのです。同じようにヨーガを実践しても、ヨーロッパでは感じることのできないエネルギーを感じるんです。あのね、今日、実は遺言を書いたんですよ。自分が死んだら埋葬しないで、モンゴルの古いしきたりどおりに風葬にしてほしいって、アルハンガイの山の中に置いてもらって禿鷹みたいな大きな鳥か犬に食べられるようにってね。それで、今日はとても幸せな気分なんです。

S：　父上の作品には不完全な形ながらロシア語訳がありますが[9]、お読みになりましたか？　お読みになっていたら、いちばん好きな作品はなんですか？

A：　はい、読みました。「四季」、それから「わが故郷」などですね。それらは訳者の東洋学の知識がしっかりしていて、ロシア語の訳の韻律がとてもよくできているからです。

S：　「妻と娘と別れて」という詩は父上の伝記を知るものにとって、胸にせまるものがあるのですが、お読みになった時はどんな風にお感じになりましたか？

A：　ここにくるまでその詩のことは知りませんでした。ここにきて、ある人が訳してくれ、初めてその内容を知り深くこころを動かされました。

S：　父上は少なくとも二回にわたって逮捕され、おそらく二回目の逮捕と拷問は父上の死に直接的な影響を与えたと思われますが、父上の逮捕や取り調べの記録について、情報の開示をもとめられましたか？今後それをご覧になるつもりはありますか？

A：　今度、ここに来て、最初に最高裁判所で粛正

の犠牲になるべき人ではなかったという父の名誉回復の証明書をもらいました。その時、モンゴル文字で書かれた1冊のノートを見ました。父に対する告発がしるされたものです[10]。投獄の際の詩はみることができませんでした。

S： 父上と母上がいつどのように知り合われたかというようなお話しはお聞きになったことがありましたか？

A： 母はレニングラードのワシーリエフ島に住んでいて、大学の漕艇クラブに所属していて、クラブ活動に熱心だったのですが、そのクラブのたまり場のカフェでナムナムドルジというモンゴル人と知り合い、彼とともにモンゴルにやって来ました。そのナムナムドルジが十人ほども子供がほしいという人物だったので、子供を産むことを嫌がっていた母は彼と別れ、その後、父と知り合ったということらしいのです。でも、詳しいことはわかりません。母は1931年に初めてモンゴルにきて、私が生まれたのが1934年ですから、その間ということになりますね[11]。

S： 1960年代から80年代の終わりまで、何度かモンゴルを訪問されていますが、その頃、発言や行動に不自由をお感じになったことありますか？

A： 最初は作家のカターエフらと、つぎにゲラシモビッチやムスタンカリムたちと、ヤツコフスカヤとも一度、観光ということできました。その頃、不自由というより、モンゴル人と話すと、モンゴル人が何かを隠そうとしているような印象がありました。たとえば、80年代には、題は忘れましたが父を主人公にした映画があったのですが、それはナツァックドルジを美化しすぎたおかしなものでした。ヤツコフスカヤもよいできの伝記映画ではないと言っていました。それには、ナツァックドルジに関わる女性はパグマドラムしかでてこず、母のことには触れられていませんでしたね[12]。

S： いま、エストニアからここに移られた理由は何ですか、誰かの助言によるものですか、それともまったくご自分の意志によるものでしょうか？

A： 全く、自分の意志によるものです。自分はモンゴルで死のうと決めたのです。私は大都会が好きではありません。私はなにより自然が好きなのです。タリンは小さくて気持ちのよい町でしたが、エストニアの生活も困難なものとなりました。年金生活はインフレで苦しく、エストニアではエストニア人と非エストニア人を区別するカードを渡されました。非エストニア人を人間として一段低くみるようなやり方には納得できませんでした。だから、モンゴルの大統領に手紙を書いたのです。私の希望は二つでした。住むところと年金の保障です。大統領と文化大臣からまもなく承諾の連絡があり、私は、それから二週間ですべての手続きをすませて急いでやってきたのです。旧ソ連で政変があるかもしれず、モンゴル側の受け入れが沙汰止みになるかも知れないと心配だったので、とるものもとりあえず、急いでやってきたのです。

S： 父上の著作権は作家同盟がもっているようですね。それから、ナツァックドルジ記念基金を創設されたようですが？

A： 私の帰国について、大統領や文化大臣とは問題なくことが運んだのですが、作家同盟は相談を受けていないことを快く思わず、最初から関係がこじれてしまいました。こちらに着くと、バダルチとダグワドルジという人物が、まだなにもわからない私をあちらこちらとひきまわして、お金あつめをしました。最初は私の援助のためだということで、トゥブ・アイマックなど[13]に行って、20万トグルクほどの集めて、そのお金を私の個人口座にいれるということだったのですが、急に、基金を創設するので私に総裁になるようにという書類にわけもわからず署名させられたのです。彼らはそれでビジネスをやろ

うとしたのです。真相が分かって、私は総裁をやめるという手紙を作家同盟に書き、文化大臣にもコピーを送りつけました。結局、お金は私のもとに入ることになったわけです。今の生活費はそのときのお金をもとにしているのです。年金は、これから出ることになっていますが、わずか月額4500トゥグルクですから、いまの貯えでは年末までしか暮らせないでしょう。

著作権については、むかしもいまも、それを主張する気はありません。

S：　だいぶ時間もたったので、最後の質問としてうかがいたいのですが、あなたにとって父上はどんな存在なのでしょうか。ナツァックドルジの娘であることを知ってから、それが嫌だったり、またその反対であったりというようなことがあったと思うのですが？

A：　最初はなんとも思いませんでした。父がいないなんて言うのは普通の時代でしたから。でも1966年に初めてモンゴルに帰って、モンゴルが好きになり、年々、その思いが強くなっています。そして私の複雑な父への思いは、この85年に書いた詩の中にあります。これは父と会っているようなつもりで書いたのです。どうぞ、この詩をお読みになって、よく理解していただきたいのです。翻訳なさるのなら、できればロシア語の韻律をいかして訳して下さるようにお願いします。ここに私の気持ちのすべてがあります。

＊　＊　＊

沢山の小さな絵が壁にかかるだけの質素で清潔な部屋の中で、彼女はビニール袋の中から美しい母の写真、自分の若い頃の写真もとり出して見せてくれた。年代を質問すると、いかにも自然科学を修めた人らしく、ノートに書いて正確をきそうと努めた。人の名前や綴りもわざわざ証拠をクロゼットから出して、調べてくれた。話は常になめらかで、情熱をおびたものだった。母については、冷静に語り、父の否定的な側面についてもそれを指弾するというより、あたりまえのことといった口調で話した。途中、自家製のシェリーを出して、「今日は本当にうれしいお祝いの日だから飲みたいの。一緒に飲んで下さいな」と言った。

父の拷問と死についての質問には目が潤んでいた。いつも左の脇腹を手で押さえていたのが気になったが、やはり一番つらかったのは、ナツァックドルジ記念基金にまつわる問題だったようだ。それを一気に喋り終えてから、彼女は脇腹の痛みに堪え難いものを感じて薬をとりにいった。私はそれに触れる質問をしたことを悔いたが、聞かねばそれがどんなに彼女を傷つけたか理解できなかっただろうと思う。彼女の体を気遣って、私は予定の質問を三分の二できりあげた。

彼女のレニングラード解放の記念日は、また一年を生きたことの証の日であったのだろうか。モンゴルの野辺にひっそりと立つオボーに棲む神々と一体になれる日への確信にみちた彼女は、また、モンゴルでのその日、その日の費えを心配しなければならない。去年の夏、挨拶もそこそこにモンゴルへ戻った彼女は、二十日から各地の係累に、さよならを告げにいくと言った。

彼女は最後の質問の答えにかわる詩のひとつしかないタイプ原稿を私に手渡した。「リエスボイ氏のようになるかも知れませんが、原稿をお預かりしていいですか」という私に微笑んで、「日本人だから信用しましょう」と言った。

二時間半を越えるインタビューのあと、めんどうなロシア語の通訳をしてくれた東洋歴史学研究所のバットバヤル氏と別れ、冷たい風の中で、なかなか来ないバスを待った。彼女にもらった詩をひったくられないように、カバンをもつ手に力をこめながら、ホビ・ザヤー（運命）というモンゴル語の単語について思いをめぐらしていた。

彼女へのインタビューをするんだと興奮した口調

で話すとモンゴル人の文学研究者の何人かは冷たく「でも、彼女は何も知らないんだよ」と言った。

果たしてそうだろうか。ナツァックドルジの同時代人が櫛の歯を欠くようにいなくなった今、知ってはいるが、言わない、書かないという伝統が歴史を曲げていく。モンゴルの将来を担う若者に、聖人でも、ただの酔漢でもない、矛盾と苦悩に満ちた詩人の本当の姿を伝えるものがいないのにどうして、その後半生をナツァックドルジの娘と自覚して生きた人間を「何も知らない」とかたづけることができるのか。

モンゴルにいると、「モンゴルのことはモンゴル人にしかわからない」という無言の壁を感じることがある。それは昔の「日本のことは結局外国人にはわからないんだ」というあの感じにも似ている。モンゴル人になるために戻った彼女、今は法律的にはモンゴル人である。しかし、人生のほとんどをロシア人として生き、モンゴル語を喋ることもできない彼女はモンゴル人だとは認められていない。

彼女が語ったように、彼女の帰国後すぐに創設されたナツァックドルジ記念基金の総裁に祭りあげられた彼女と、もともと帰国交渉が作家同盟の頭越しに行なわれたことに不快感をもっていたモンゴル側の理事たちの間に基金の資金運用をめぐってトラブルが発生した。モンゴル語が分からぬ彼女に十分な説明がなされなかったことがさらに問題を複雑にしたのだが、相互不信の根底には、現在ナツァックドルジの著作の権利をもっているモンゴルの作家同盟側が、彼女を「本当のモンゴル人」としてみなしていないという事実がある。ソビエト崩壊の後のバルトの偏狭な民族主義を避けて、モンゴル人として六十年間のアイデンティティーの空白をうめようと必死になっている彼女が、父の国で出会ったものは皮肉にもまた民族主義的な壁であった。

彼女が渡してくれた「父へ」と題された極めて難解な詩の中で、彼女は時空を超えて父親と出会い、人に流れる時間と愛について語り会う。彼女がE．A．ポオの「大烏(The Raven)」の詩に触発されてそれを書いたと語ったとき、私は形容しがたい感慨にうたれた。 彼女は勿論知らないことだが、私がモンゴルまでその手稿を求めてやってきたモンゴルでの初めてのロマン主義小説、ナツァックドルジの「黒い岩」は、まさにそのポオの影響のもとに書かれたものである。その作品に登場するニーナこそ、彼女の母ニーナであり、そして、かつて私は自分の論文の中で、「黒い岩」の基調は、直接影響を受けたとされるポオの「黄金虫」よりむしろ「大烏」であると指摘したのだった[14]。

感傷に過ぎると笑われるだろうが、不思議な因縁に導かれて、現代史の大きな波のうねりに翻弄されつづけ、ようやく自らの意志で人生の最期を迎える場所を決めた一人の女性が、時空を越えて、記憶の中にはない父親に手をさしのべ触れ合おうとしている、その指先を見たような気がした。

この覚え書きは、学問的な見地からすれば資料的価値の乏しいものかもしれない。しかし、彼女との出会いをその印象を含めて、書き留めておく義務が自分にはあるように思えた。

アメリカ、セントルイスでこの文章をおよそ書き上げた頃、ウランバートルの友人から一通のファックスが届いた。

95年1月、モンゴルの新聞が彼女の死を報じたというのだ。12月25日から31日の間に自宅で亡くなり、その死因は捜査中であるという小さな記事だった。

註

1) 「ある娘の里帰り」『グリオ』 Vol.7 平凡社 1994

2) 独学のモンゴル学者として有名なアレクセイ・ワシリエヴィッチ・ブルドゥコフの娘。父娘については、N．ポッペの『ニコラスポッペ回想録』村山七郎監修、三一書房1990、P59。

3) 文学史上よく知られた三人のナツァックドルジがほぼ同時代に存在したために、モンゴルでも彼ら

が混同されて語られることもあったと言われている。

4) 1936年という証言もあるが、ニーナがナツァックドルジのもとを去ったのは1935年の11月とするのが正しいようだ。その原因についても多くの証言や憶測がある。直接関係者以外にはなんらかの政治的な理由があったと見る人もいまでも多いが、それを証拠だてる資料はいまのところない。

5) 彼の女性遍歴は有名で生涯に関係した女性は20人にもあまると言われるが、P・ホルローが愛人の一人であった人物の回想を記録している程度で、モンゴルでの伝記、評伝でそのことに詳しく触れたものはまだない。

6) S．ロチンが85年に出版した『月光』と題するエッセー。このエッセーはロシア文学のジャンルのひとつで、日本で考える随筆ではない。評伝風であるが、作者自身がいうようにあくまで文学作品であって伝記の研究書ではない。

7) ナツァックドルジの手稿の研究者であったCh．ジャチンは，「黒い岩」の登場人物ニーナは正しくはイーナと読むべきであるとして、その名の奇異さの傍証として、ナーナが両親の名前の合成であると主張している。

8) 彼女の名前はロシア文字表記でアーナンダシリと書かれているが、彼女のいうとおり、吉祥を意味するシュリーであることは間違いないので、本稿でも彼女の名前の表記をアーナンダシュリーとしている。

9) 1956年、モスクワ発行のナツァックドルジの翻訳選集。Ts．ダムデインスレンが監修したもの。前述のブルドゥコヴァも翻訳に加わっているが用いられたテキストについては疑問がある。

10) この内容についての詳細は不明。1932年の逮捕が不当なものであったことについては最近の新聞などでもその正式な名誉回復が報道されているが、1936年の政治的なものでない逮捕についての詳しい再調査が行なわれたかどうかについての公の報道はなされていない。

11) 二人の出会いについては謎が多い。ここで彼女が伝聞として話したのは、モンゴルでもいちばん合理的だと思われている説であるが、誰からの伝聞であるかは語っていない。1930年に書かれたナツァックドルジの「黒い岩」に登場するニーナと同一人物であるとすれば、ふたりの出会いは1930年、ないしそれ以前のはずである。そして、あるインタビューにおいてニーナ自身が1930年にはナツァックドルジを知っていたと証言している。この問題の詳しい吟味は別稿に譲るが、ニーナ自身の証言として伝えられるものには矛盾が多く、彼女の行動にはドストエフキーのカーテリーナやグルーシェンカを連想させるほど、ロシア的な韜晦が感じられる。

12) パグマドラムはナツァックドルジの最初の妻であった。人民革命党の女性党員としての輝かしい経歴をもつ彼女の生涯も謎に包まれている。二人は夫婦でドイツに留学した後、離婚するがその理由についても様々な風聞がある。離婚後、パグマドラムはある中国人と再婚するが、夫婦ぐるみでナツァックドルジとの付き合いがあったとされ、彼を最後に葬ったのも彼女らであるとする説もある。

13) ナツァックドルジが生まれた場所として公に碑を建てられているところがあるが、実際、本当の生地がどこであるのか判然としてはいない。その理由については歴史家A．オチルがかつて述べてた通り、彼自身が身上書に異なる場所の名前をあげていることや、行政区域の線引の変更で、地名と場所の関係が不明になったためなどである。いずれにしても、旧トシュエトハンアイマック、現在のトゥブ・アイマックが彼の郷土である。

14) 拙論「ナツァックドルジ・ノート」、『モンゴル研究』No.7 1984、（拙著『近代化と文学』アルド書店 1987に再録）。「黒い岩」とその草稿については他に拙論「モンゴル最初のミステリー小説の謎」、毎日新聞大阪1994·11·8夕刊を参照。

（しばやま　ゆたか）